

「やさしい日本語」研修会に求められるもの
—小学校の教員対象のアンケート回答結果を基に—
坂本勝信（常葉大学）・安井朱美（名古屋外国語大学）

1. 本研究の目的と意義

浜松市教育委員会（2022）によると、静岡県浜松市の公立小中学校に在籍する外国籍児童生徒数は、2015年以降増加しており、2021年には1864人と過去最高となるとともに、令和5年には30国籍と多国籍化が続いている。市教育委員会は、バイリンガル支援者を小中学校に派遣するなど様々な支援体制を整えているが、少数しか在籍しない言語に対応できる支援者の確保が難しくなっている。そのため、学校に「やさしい日本語」を普及させることが必要であると考えるようになった。「減災のため」であった「やさしい日本語」は、現在は生活情報や観光情報を伝達したり外国人住民と日本人住民の交流を促進したりする「平時のためのもの」にまで広がりを見せている。ただ、全国各地で開催されている「やさしい日本語」研修会は、その多くが一般の日本人住民や企業、自治体職員等を対象にしたものであり、日本語指導が必要な児童生徒（以下、外国人児童）が在籍する小中学校教員を対象にしたのは、管見の限り、静岡県教育委員会（2019）の1件のみであった。

本研究の目的は、外国人児童が在籍する小学校の教員を対象にした「やさしい日本語」研修会後のアンケート結果から、研修会に求められるものを一考することである。

2. 「やさしい日本語」研修会の概要

浜松市教育委員会主催で行われた本発表における研修会の正式名称は「学校版『やさしい日本語』活用研修会」である。2022年7月に浜松市内のA小学校（33名）とB小学校（28名）の教員を対象に、それぞれ2時間ずつ行われた。両校ともに日本語指導が必要な外国人児童が約30名在籍している。本研修会で使用したものが「学校版『やさしい日本語』の手引き」である。同手引きは、教育委員会からの依頼により発表者が市内の小学校の教員、市国際課職員、国際交流協会職員、教育委員会職員など12名で、2020年度に約1年間かけて作成したものであり、学校の教員が活用できるよう配慮された内容となっている。なお、研修会は、1）やさしい日本語とその必要性について（講義）、2）「学校版『やさしい日本語』活用のための手引き」の概要など（講義）、3）やさしい日本語化のポイントと練習（ワークショップ）の3つのパートから成る。特に3）では学校で役立てられることを意識して進められた。学校の便りや成績に書かれた日本語をやさしい日本語へと変換するポイントを学んだ後、練習問題に取り組んだり、授業時の教師の発話例をどのように言い換えるか話し合っ共有したりする活動を行った。

3. アンケート調査の概要

研修会終了時に紙面によるアンケート調査を研修会に参加した教員、計61名に実施した。質問項目は大別して①教師歴、②外国人児童に関わることで普段感じていること、③外国人児童のための授業中の日本語面配慮の有無、④研修会の満足度とその理由、⑤研修会で特に役に立った

と思うこと、⑥やさしい日本語にする際に特に難しいと思うことの6問である。

4. 結果と考察

紙幅の関係から以下、質問項目②③⑥に関してのみ記述する。質問項目②の結果から、教員が考える外国人児童の問題点は「授業中の教師の指示がわからない(38.5%)」「授業についてこれられない(35.4%)」など授業に関することであることがわかった。ただ、質問項目③からは教員が彼らのために日本語面の配慮をする頻度は「ときどき(38.7%)」「たまに(30.6%)」であり、「常に(17.7%)」は比較的少ない様子が見えてくる。これらの結果から、教員は外国人児童が授業に問題を抱えていることは認識しているものの、そのために日本語を常にやさしく言い換えるような配慮はしていない、あるいは、しようとしていても実際はできていないと言える。また、質問項目⑥のやさしい日本語にする際の難しさについては a.「どの語が普通の日本語でどの語がやさしい日本語か見分けること」が18.8%と最多で、b.「初級文法の組み合わせを易しく言い換えること」17.3%、c.「どれが多義語・多義文法か見分けること」が16.8%、d.「易しい語彙・文法に言い換えること」15.2%と続く。これらの点から、教員にとっての第一関門は a、c のような語彙や文法の難しさを判別することであり、この判別ができなければ必然的に b、d のように普通の日本語を易しく言い換えること(産出)が困難になるか、そうする必要性に意識が及ばないと推察される。斎藤・池上・近田(2015)は、「髪を結ぶ」と「点 A と点 B を結ぶ(算数や数学) / 条約を結ぶ(社会科)」などの多義語及び、日常生活の口語表現である縮約形「～ちゃった」(発表者註:「～ちゃった」は口語的文法 / 「～しまった」は文語的文法)を例に、日常生活と教科内容の学習の語彙・表現には違いがあると述べている。学習言語能力のほうが生活言語能力より難易度が高いと捉えられていることから、前述の「結ぶ」では「条約を結ぶ」などのほうが「髪を結ぶ」より、そして、文法では「～てしまった」のほうが「～ちゃった」より難しいと考えられる。しかし、教員はその難度の見分けがつかないゆえに、使用表現の配慮なく、教科学習の日本語を用いて授業を進めることがあり得るだろう。

以上から、「やさしい日本語」研修会で求められるものは、第一に、教員の言語使用の範囲、具体的には保護者への便りや成績また、授業時の教師の発話など、筆記と口頭を網羅した質量ともに充実したポイント集や言い換え用語集などを提供すること、第二に、それらを用い、「部屋に入る」と「夏休みに入る」「情報が入る」などの多義語や「生活が大変なようだ」「まるで春のようだ」「風邪をひかないように」などの多義文法に気づけたりその存在を意識することの重要性が知れたりすること、第三に、用語集などを参照し、難度判別や言いかえのコツを学んだ上で、その知識を応用した産出練習に取り組めるような実践的なワークであると考えられる。

【引用文献】

- 齋藤ひろみ・池上摩希子・近田由紀子(2015)『外国人児童生徒の学びを創る授業実践「ことばと教科の力」を育む浜松の取り組み』くろしお出版
- 静岡県教育委員会(2019)『「やさしい日本語」活用促進事業実施報告書』
- 浜松市教育委員会(2021)『学校版「やさしい日本語」活用のための手引き』
- 浜松市教育委員会(2022)「外国人子供教育推進事業」

<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/documents/85593/r4gaikokujinjigyou.pdf>
(2023年2月24日閲覧)